活動報告

学内外における諸活動報告

富川 理充（商学部准教授）

リオ2016オリンピック・パラリンピック大会が終わり、国内では既に3年後と迫った東京2020大会に向けて盛り上がりを見せ始めている。本学も3年後には商学部が神田キャンパスへ移設するなど大きな転換を迎えることとなる。筆者にとっては今後の飛躍のための過渡期の2016年度となったが、改めて主な活動に関して紹介する。

Ⅰ．教育活動

演習科目、理論科目のほかに、教養ゼミナール（マルチスポーツへの誘い）、融合領域科目の授業を担当したが、ここでは特に最後の融合領域科目について紹介する。

「パラスポーツの現状（パラリンピック）」として2015年度より開講した科目である。後期15回のうち、約半数の授業に学外講師を招聘し、各々の専門領域に関する話題提供をしていただいた。講師方々の都合を鑑み水曜5限に配置していることもあり、履修登録者は初年度20名程度、今年度は25名と少な目であった。ただし、受講生のレポートからも関心の高さを窺い知ることができ、3年後には今の倍程度にまで増えることを期待している。ご担当いただいた講師方々にこの場をお借りして改めて御礼申し上げるとともに、各講師が担当された授業テーマを紹介する。

2016年度「パラスポーツの現状（パラリンピック）」学外講師担当授業（当研究所外の学内教員含む）

「障がい者のQOLとスポーツ」（野口武悟氏、文学部教授）／**「パラリンピックの世界」**（星野恭子氏、フリーランス）／**「リオデジャネイロパラリンピックに関して」**（河合純一氏、(独)スポーツ振興センター研究員研究員、アトランタ・シドニー・アテネパラリンピック金メダリスト）／**「パラ水泳の現状」**（木村敬一氏、東京ガス(株)、ロンドン・リオデジャネイロパラリンピック銀メダリスト）／**「パラサイクリングの現状―東京が見えるのか、見えないのか―」**（権丈泰巳氏、(一社)日本パラサイクリング連盟理事長）／**「ブラインドテニスの現状」**（松居綾子氏、埼玉県教員）／**「スマイルクラブのアダプテッドスポーツ（障がい者スポーツ）について」**（大浜三平氏、(特非)スマイルクラブ理事）／**「7人制（CP）サッカーの現状」**（神一世子氏、(一社)パラSCエスペランサ代表理事、(一社)日本CPサッカー協会理事）／**「5人制（ブラインド）サッカーの現状」**（大嶽真人氏、日本大学文理学部教授）

※この他に、大浜あつ子氏（(特非)スマイルクラ理事長）、浦辰大氏（7人制サッカー日本代表選手）、橋口泰一氏（日本大学松戸歯学部准教授）にもお越しいただいた。

Ⅱ．研究活動

平成27年度全国大学体育連合の大学体育研究助成の研究成果として、「『体育』演習から『スポーツ』教育へと転換した大学教養体育の授業効果;一私立大学の実践事例」と題した論文をまとめ、大学体育学へ投稿した（富川ほか、印刷中）。2014年度に現行カリキュラムへ移行後、スポーツリテラシおよびスポーツウェルネスの授業評価の材料として行った学生に対するアンケート調査の結果をまとめた論文である。当初設定した教育目標に対し、概ねそれらが達成されていたことが示唆された。この結果は、当研究所の第3回研究会で報告した。さらに授業研究に関しては、2015年度まで本学兼任講師を務められた石倉恵介氏（崇城大学総合教育センター教授）の共著者として、本学のPFCの授業中に行ったトレーニングの効果に関する論文をまとめた（石倉ほか、印刷中）。その他、日本義肢装具学会誌32巻4号の特集「パラリンピック最前線」の中で、パラトライアスロンに関して寄稿した（富川、2016）。

学会では、昨年度末に木内敦詞氏（筑波大学体育系教授）よりお誘いいただき、2016年6月に立命館大学茨木キャンパスにて開催された大学教育学会第35回大会に参加し、「大学体育の成績評価を考える」をテーマとしたラウンドテーブルにおいて専修大学の事例を発表した。愛媛大学、筑波大学の大学教養体育の成績評価の現状と課題についての発表もあり、ルーブリックの開発・活用、学習支援システムの有効活用など研究すべき事柄の情報収集の機会ともなった。発足当初より当研究所が協力しているトライアスロン研究会（主催：(公社)日本トライアスロン連合）は今年度で第6回を数え、2017年1月に神田キャンパスにて開催した。過去最高となる70名近くの参加者が集まり、基調講演2題目、一般演題も11題目と非常に内容の濃い充実した研究会となった。

Ⅲ．社会貢献活動

リオ2016オリンピック・パラリンピック大会へ、日本パラリンピック委員会より村外競技支援スタッフとして派遣されパラトライアスロン日本代表ヘッドコーチとして活動した。パラトライアスロンはリオ2016大会で正式競技として初めて実施され、日本人選手も男子2名、女子2名（＋ガイド1名）が競技し全員完走を果たすことができた。東京2020大会に向けて、既にルールの見直し、クラス分けの再編がなされており、新シーズンより新たな挑戦を始めることとなる。帰国後は、様々なシンポジウム等においてパラトライアスロンを紹介・報告する機会をいただき感謝している。そして、東京2020大会に対する世間の関心の高さを改めて感じるとともに、責任の重さも再認識することとなった。これらの経験は、当研究所主催のスポーツ実践公開講座や担当科目の授業においても伝えるように心掛けた。今後も、学内外の諸活動を通して得た知見を、本学学生のみならず広く社会に還元・発信するように努めたいと思う。

参考文献

石倉恵介、佐藤和、富川理充（印刷中）．週一回の大学体育授業におけるトレーニングが身体に及ぼす影響．専修大学スポーツ研究所紀要、40.
富川理充（2016）パラリンピック最前線　パラトライアスロン．日本義肢装具学会誌、32(4); 265-269.
富川理充、相澤勝治、齋藤実、渡辺英次、平田大輔、李宇韺、佐藤雅幸（印刷中）．「体育」演習から「スポーツ」教育へと転換した大学教養体育の授業効果；一私立大学の実践事例．大学体育学、14.

パラトライアスロン競技が実施されたコパカバーナビーチ